

アッシジ刺繍の表現法とデザイン (第2報)

井上拓子

序 論

19世紀の半ばヨーロッパ北部の国々に比べ工業化の進歩も遅れていたイタリアでは他の地方からの技術(伝統)を学び伝えるのではなく、イタリア独自の伝統技術を甦らせることに力を注いだ。そして、1861年にイタリア新国家設立に伴い貴族の女性達の中に芽生えた愛国心において、イタリアの伝統工芸の発見するに至る。ここで取り上げるアッシジ刺繍のアッシジという町は世俗的な伝統は全くなく、聖フランシスの生誕地とする宗教的な町でしかなかった。しかしそこで息づく人々によって教会の伝承物(遺産)や町の修道院からの伝統的なデザインを引用し、更に受け継がれて来た刺繍技術を単純化させ、新たな刺繍を作り上げた。そうした中で、アッシジ刺繍は商品としての価値を見出し、優れた家庭内工業として発展し、そこで働く貧しい女性達の生活の糧とし、新たな資金源として発達をとげた事を第一報(和洋女子大学紀要・第38集家政系編)で報告した。

また、新たな試みとして、アッシジ刺繍には色の決まりもあり、それを考えた上で図案が構成されているが、何色かの色を使用し、デザインの立体感を表現することを試みた。

今回は更にアッシジ刺繍の基本的なデザインを展開し、新しいデザインや配色の組み合わせによってアッシジ刺繍の構成の表現や効果を考察する。

アッシジ刺繍について

18世紀ロココ時代に手芸の最高期を迎えることになるが、18世紀後半から始まった産業革命は機械による規格品の大量生産によって手工芸品を没落させて行くなか手芸は上品な趣味として良家の子女のたしなみのひとつとして教育期間によって伝承されるようになる。しか

し、その一方で貧しい子女に生活の糧を与える場として宗教団体などによって技術教育されたのも事実である。アッシジ刺繍はまさしく、生活を支えることを第一とした商業的な意味を持つ、生産性を高めるために技法の単純化を図り、商業としての成功を納めた。アッシジ刺繍の技法はホルベイン・ステッチとクロス・ステッチの2種類である。独語でホルベイン・ステッチと呼ばれ、英語ではスパニッシュ・ワーク・ダブル・ランニングと言われ、アウト・ラインを描くのに用いられる。クロス（十字）ステッチの基本形は仏語でグロ・ポワンといい針を布地のたて糸を一本またいで斜め右上から刺し次に斜め左下に向けて地布のたて糸をまたいで刺す（テントステッチ）。中世からルネッサンスにかけてのクロス・ステッチの主流はこれにあたる。

12～13世紀にかけてリネン地にロングアームド・クロス・ステッチで埋められるものもある（アッシジ刺繍では主に図案の背景に使用される）。

図案も古典的で古代神話や宗教伝説がモチーフとなっている。他の刺繍と違い麻布と綿糸を使用するため豪華さには欠けるが、図案の持つ精神性の様なものを感じる。

アッシジ刺繍のデザインについて

アッシジ刺繍のデザインは中世イタリアの世俗的な刺繍においてモチーフをルネッサンス時代に主流になったグロテスク意匠（ギンサチュロスなど）古代の伝説上の獣が用いられていた。一方神聖な刺繍においては鳥や動物が対象に形成され、繊細な唐草文様やアラベスク文様に囲まれて構成されるなど伝統的なデザインに強く影響を受けている。

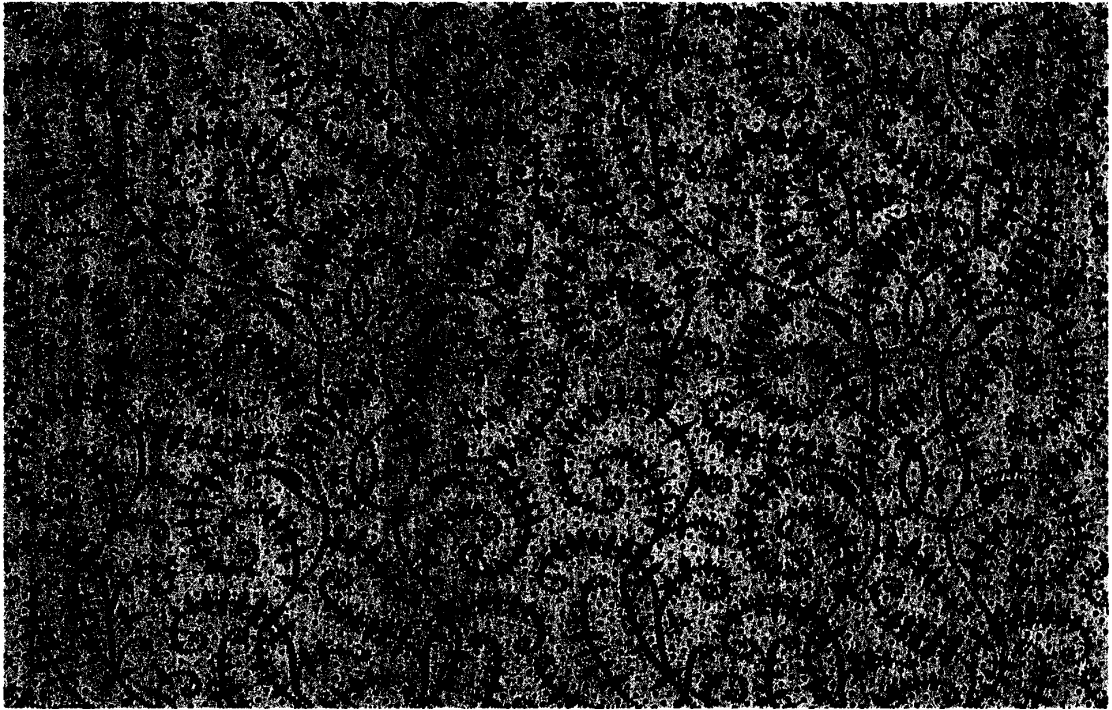
自然界の動植物から古代神話のモチーフを取り入れることがひとつの流行になった。古代ギリシャ・ローマの神々の物語のシリーズなど神話や中世以来の旧約聖書に基づく、神々の試練をモチーフにしたものなど草花や古代神話・宗教伝説などは、ヨーロッパのキリスト教世界全体のものだった。

それぞれの文様には意味があり、人間の願望（不死・富・宗教観念など）の象徴でもある。
—唐草（ブドウ葉・豆などの鋸歯状）—

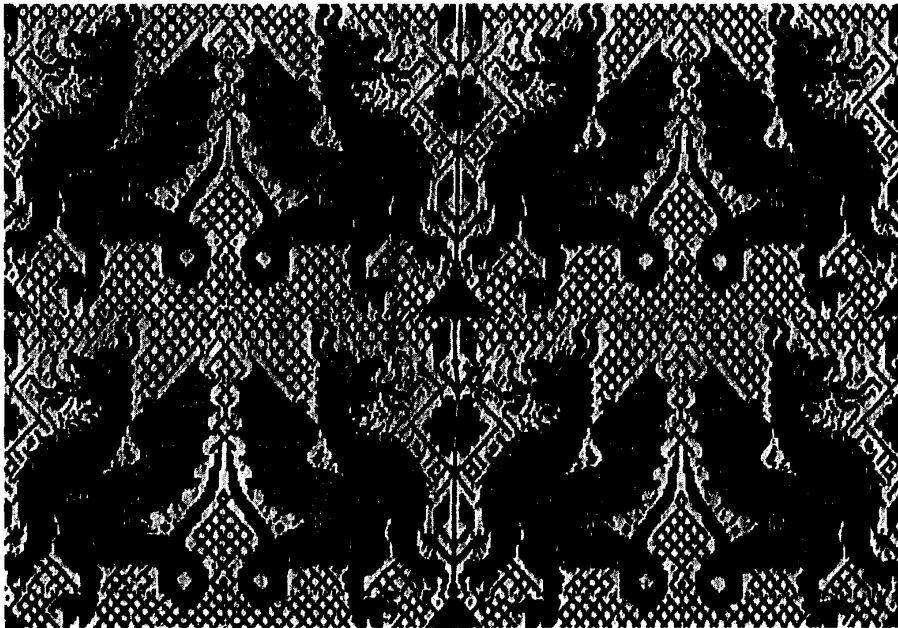
空間を埋めていく文様として最も多く利用され東西にひろく知られている。唐草の特徴は曲線による繰り返しと反復で連続性が保たれている。無限にも似た線の連続性、それは永遠なるもの、無限なるものの象徴である。

—聖獣文様（天馬・竜・獅子・動物文様）—

動物文様を配した衣服を王が着用するのは強い権威の象徴であった。空想上の生物が多く古代、王が人間よりもはるかに協力で恐るべき存在となった。総合してつくられたイメージで



写真—①



写真—②

衆人を畏怖させる威力となる。天馬は空中を自由に飛び天上世界との交通出来る能力としての神聖性の一表徴である。鳳凰は鳳は火の精・凰は雌の意があり、不死の意が込められている。

一人面・人像文様

古代の人面文様は一般に呪術的で神秘性の意を含む、石像に多く使われるが墓室を飾るものもあり、死後の世界を語るものである。

一生命の木文様（世界樹）

アッシジ刺繍の図案に問わず、多くの手工芸品に利用される文様である。原始信仰に基づきあらゆる造形のデザイン・ソースになっており、世界の中心に大きな樹木（世界樹）がある。木は大地に定着し、エネルギーを吸収して成長すると考えられ、大地母神のシンボルである。世界樹を中心に左右対称に獣鳥類が配置され、中世より伝え守られてきた文様であるが、規定にとらわれず身近なものでデザインする事も可能である。

色と素材について

アッシジ刺繍の色の原則は無地（主に白）亜麻布に2色の糸が使用され、コントラストを明確にした色彩である。アッシジ刺繍で最も好まれる色のコンビネーションはアウト・ラインに黒や茶とダークカラーに、背景を青・赤・金などでアウト・ラインを十分に際立たせる様仕上げ、効果を上げている。

近年はこの色の原則にとらわれず、デザインにあった色彩をポイントにして、多色使いをするのも効果的であると思う。また、本来はアウト・ラインに使用する黒などのダークカラーを背景のクロス・ステッチに使用する事も面白みがある。この時には文様が明確でアウト・ラインを太めの糸で鮮やかなものを使うのが好ましい。

素材について亜綿布の平織で均一な（1cm10目～12目）が主に使用されているが、使い勝手の良さを追求すると布目のはっきりとしたクロス・ステッチ用の布が適している。

デザインの基本的な構成

- ①円形のメダリオン（中心）
- ②装飾された縁取り（ボーダー）
- ③唐草模様（コーナー）

制作過程

習作1はアッシジ刺繍の古典的な図案であり、植物を中心に左右対称に兎を配置した黒色



写真—③ 古典的な図案 12C



写真—④ 古典的な図案 12C

でホルベイン・ステッチに背景に赤でクロス・ステッチをした。クロス・ステッチの上下に黒色で唐草模様で飾線し中に2目緑色でクロス・ステッチした。

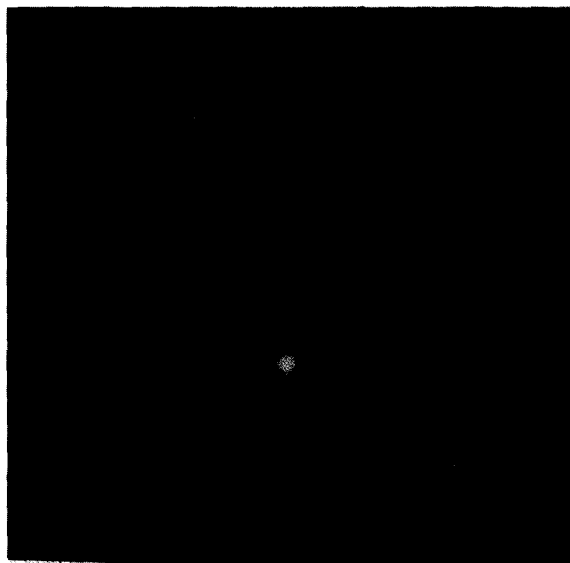
本来は2色で行うアッシジ刺繍であるが、ポイントに刺色する事により図案に華やかさが増し効果的である。

材 料

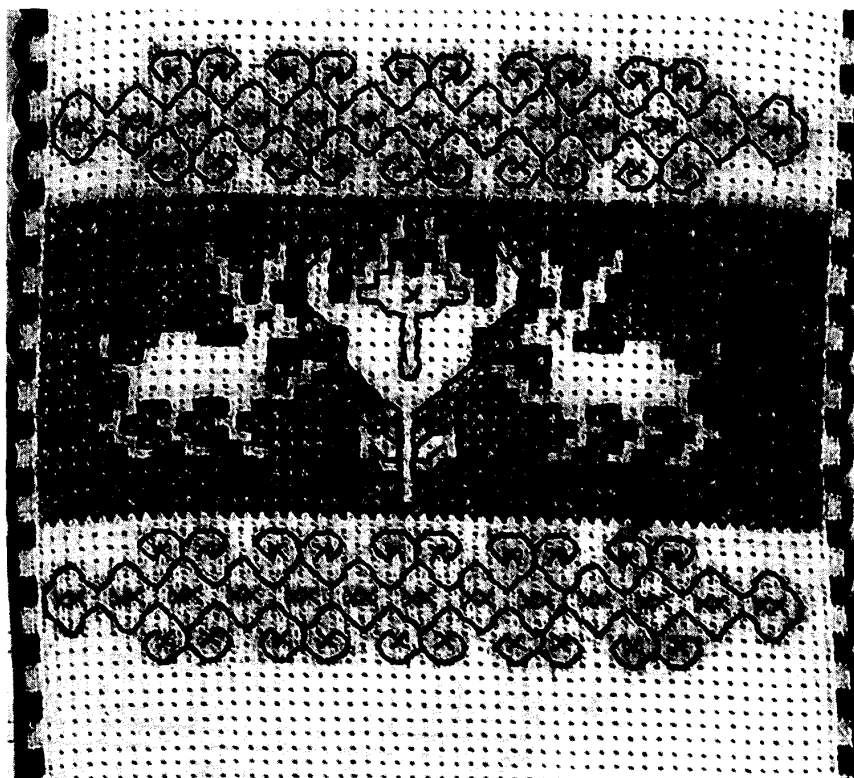
赤のトリミングのジャバリボン

9×15c ゲージ（4×4）

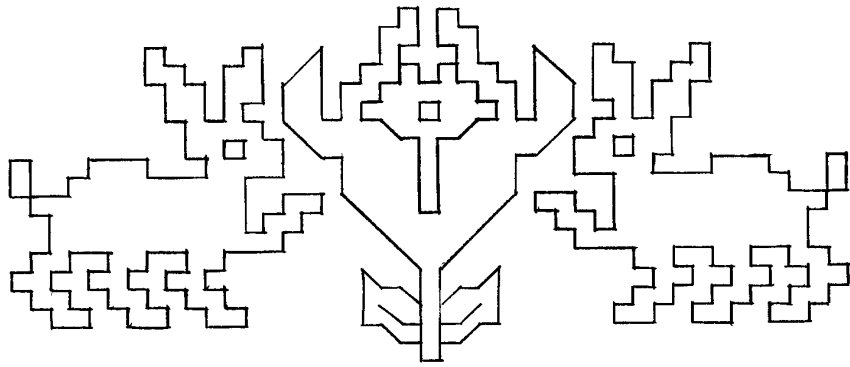
糸DMC



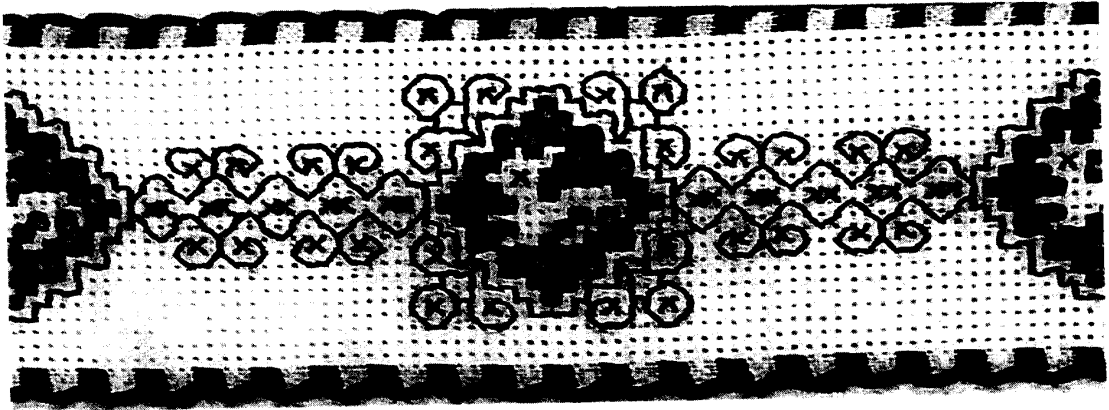
写真一⑤ 古典的な図案を使い17世紀の作品
を再現したもの
(日本服飾学会作品展示したもの)



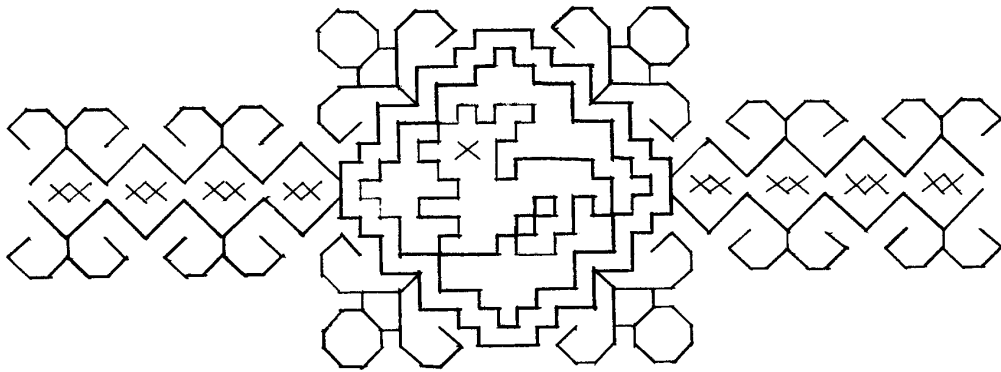
写真一⑥ 習作1



図案—① 習作1



写真—⑦ 習作2



図案—② 習作2

習作2はアッシジ刺繍で使用される飾り縁(ボーダー)でステッチした。本来はメインにならない図柄を選んだ。

兎と唐草を黒色でホルベイン・ステッチした菱形の中の背景を青色でクロス・ステッチした。

材 料

青のトリミングのジャバリボン

4×18c ゲージ (4×4)

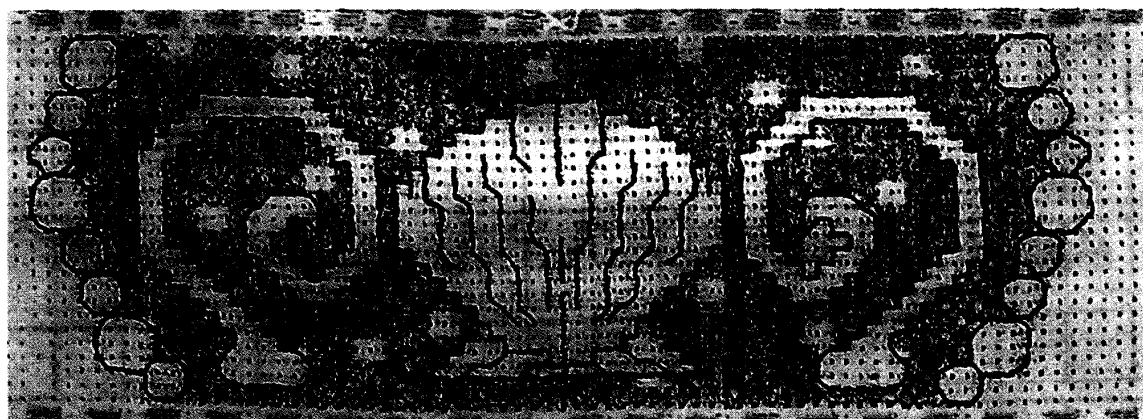
糸DMC

習作3はアッシジ刺繍の図案からでなく、クロス・ステッチ図案からデザインを選んだ。シェルを中心に巻貝を簡略した模様左右対象に配置し、水玉模様で囲んだ。

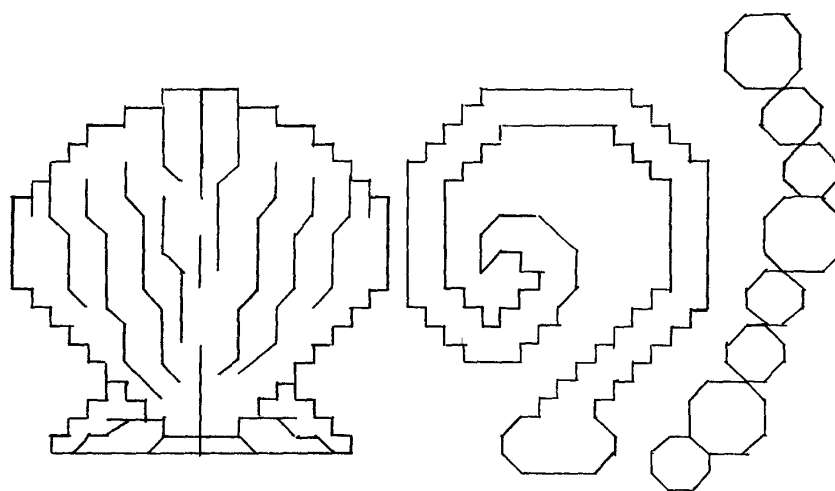
アッシジ刺繍のデザインに固定せず、アウト・ラインのはっきりした図案であれば、どんなデザインでもアッシジ刺繍の図案になりうる事を確認した。

材 料

縁のトリミングのジャバリボン



写真一⑧ 習作3



図案一③ 習作3

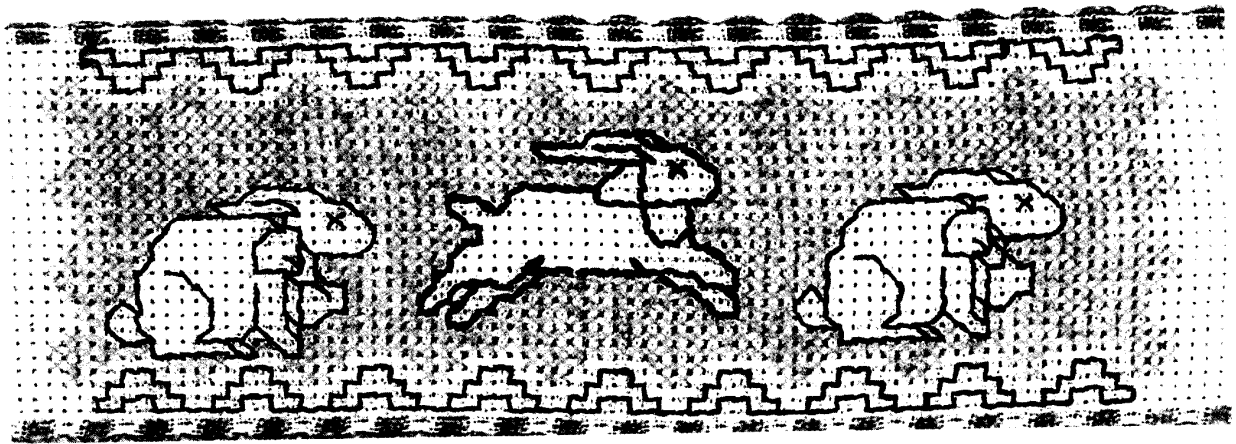
6 × 15c ゲージ (4 × 4)

糸DMC

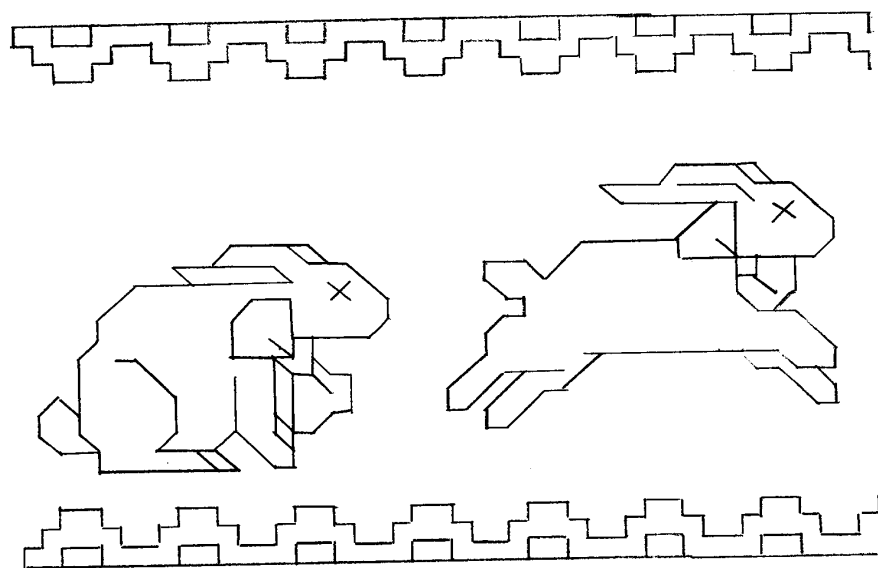
習作4は習作3と同様にクロス・ステッチの図案から選び、ステッチした。本来アッシジ刺繍の図案は左右対象で構成されているが、習作4は動物(兎)の追いかけて模様になっている。アッシジ刺繍の規約には反しているが色の原規を守りステッチする事により、クロス・ステッチの図案でアシメトリーなデザインも十分にアッシジ刺繍として表現出来る事を考察する事が出来た。

材 料

深緑のトリミングのジャバリボン



写真—⑨ 習作4



図案—④ 習作4

6 × 15c ゲージ (4 × 4)

糸DMC

考 察

今回の習作は古代神話や宗教伝説のモチーフにデザインを限定せず、身近なものに目を向け、世俗的な造形やクロス・ステッチの図案からもデザインを起用し、アッシジ刺繍の規定にそいながら制作を試みた。

固定観念に縛られる事なくデザインを起こして行くと応用範囲が広がり、より実用的で室内装飾や衣服の装飾に活用することが出来る。

今回の習作での収穫は、○市販のジャバリボンを使用する事により、仕立ての過程を省く事が出来た事と、布目がカウントしやすく正確で従来よりも簡単に制作が可能な事である。○図案もアッシジ刺繍専用のものでなくクロス・ステッチ用や欧風刺繍や日本趣味のものであらゆる形態が表現可能である事。○多色使いにより、より立体的で表現力の幅が広がり美しい構成が出来る事を再確認した。

今回の紀要にあたり、イタリア文化史料館図書館で検索した結果、アッシジ刺繍の資料が乏しくイタリア人自身も知識や存在を知らなかった。近年手作りの良さが見失われ大量生産出来る工業デザインがはびこる中、家庭生活を美的で豊かなものに出来る手工芸を傳承する事に大きな意義があり、刺繍の持つ表現力の魅力の大きさを改めて確認させられた。

また、技法やデザインの単純性の利点を生かし、商品化された土産品に留まらず生涯教育の観点からアッシジ刺繍を捉え、技術の向上と啓蒙に努めたい。

参考文献

「Assisi Embroidery」Era Maria Leszner社

「Punto Assisi」EDITRICE MINERVA社

「手芸の文化史」飯塚信雄著文化出版局

「文様の博物誌」吉田光邦著 同朋舎

「ヨーロッパのテキスタイル史」辻ますみ著 岩崎美術社

(家政学部服飾造形学科助手)